

「もっと俺らを頼ってくれよな、ノア」

言いながら、頭の後ろに手を組んだノランと、ぐったりした顔のネックがバルコニーにやって来た。「お祭りに行ったんじゃないの？」と、リアム。

「ノランが財布を忘れた」

ネックが呆れたように言うと、ノランは「せっかく美人なお姉さんいたのによお、金がなきゃ意味ねえってもんだよ」と肩を落とした。

「けど、ちょろっと見た感じ、昼間にはなかった屋台が結構出てたぞ！」

驚異的な立ち直りの早さにネックが思わず苦笑し、「リアムとノアも行こうぜ」

と二人を見た。

「せっかくだし、ゆっくり見て回る？」

リアムはノアに笑顔を向けて、

ノアは迷って、迷って迷って、やがて小さく、こくりと頷いた。

リアムはにこりと笑った。ネックとノランも、ニッと笑った。

三人はやいのやいのと言いながら、バルコニーから部屋へと戻っていく。

ノアはその背を見つめながら、思う。

——いつかこの三人に、恩返しができるなら。

違う。

できたら、じゃない。

恩返し、する。

その想いに嘘はない。自分のためにと懸命に動いてくれる三人に、言葉以上の感謝を示したい気持ちに偽りはない。

それなのに、その想いを抱く度に、どうして——

……どうして、こんなにも心がざわざわするのか。

何を言えばいいのかわからない。

でも、今、何かを言わなくてはならない。

何かを言わなくては、三人と近づけない。

そんな気がしてたまらなかった。

だから、

「——みんな。本当にごめんね」

うつむくのではない。

ノアは三人に向かって、しっかりと頭を下げた。

すると三人は目を点にし、見事なまでにキョトンとした。

「ごめんね、か」

ネックが呟く。

そして三人は顔を見合わせ、小さく微笑み合った。

その時。

ノアの背後で、大音声が炸裂した。

まるで大太鼓が破裂したような、骨の髄まで響く音だった。音の衝撃で、全身を後ろからわずかに押されるほどである。突然のことで声を出す暇もない。あまりにびっくりしすぎて、ノアは直立不動のままカチンと固まってしまった。

それでもなんとか、錆びた機械のようにギギギと首を動かして見ると、三人がぼかんと自分の後方を見つめている。いや、後方というか、みんなの視線は空に向いている。なんだか焦げ臭い風が漂ってきて、ネックは口笛を吹くような顔をして、ノランはあんぐりと口を開けて、リアムは手のひらを口元に当てて、

また大音声。

今度は「きゃあっ」と声が出た。

背後で鳴り響く、正体不明の音。

そして今気づいたが、その音と共に辺りがカッと明るくなって、バルコニーに自分の影が現れる。

音と共に、光を放つもの。

記憶はない。けれどなぜか、それが危険なものであると知っている。

——いけない。

みんな、ねえ、何かよくわからないけど、危ないよ、逃げようよ、絡まる舌を解き、三人に向けてなんとかノアがそう言おうとして、また大音声があつて、

「——わあっ！」

リアムは胸の前でぱちぱちと拍手をして、それからノアの後方の空を指差して、

「ほら、ノア！　すごいよ！」

リアムは少しも慌てていない。どういふことか一層にわからない。

ノアは、おそろおそろ、びくびく、ゆっくりと背後を振り返って、

眼前の空に、大輪の青い花が咲いていた。

馬車から見かけた路傍の花とは、まるでスケールが違う。その何十倍、何百倍、何千倍も巨大な花が、夜空で眩しい光を放っていた。その花弁は流線を描いて流れ落ちていき、やがて溶けるように消えていった。

と思ったら、またパアッと空に花が現れた。今度は赤い花だ。少し遅れて音と衝撃がある。その花が消える前に、次は別の金色の花。続けて、緑、赤、金、青、赤……。

その音と光はしばらく続き、夜空は色とりどりの花で彩られた。

「すっげえー！」

ノランがバルコニーの手摺に掴まり前のめりになる。

「綺麗だな……」

ネックがぽつりと呟き、

「うん。本当に、本当に……！」

リアムが深く頷く。

ノアは、心を奪われたように夜空の花を見つめながら、

「あれも、魔法……？」

「あれはね、花火だよ」

「はなび……」

「そう。職人さんが作ったのを祝い事とかお祭りの日に上げるんだけど、貴重だから滅多に見られるものじゃないの」

リアムは感嘆の息を吐く。

「それにしても、まさかこんなに綺麗に見えるなんて……」

「この部屋で大正解じゃねえか？」と、ノラン。

「ああ。宿の情報を仕入れてくれたリアムと良い部屋を用意してくれた宿に感謝だな」ネックが続けた。

感謝。

ノアは慌てて口を開こうとする。してもらってばかりの自分が言えることを言おうとする。自分が持っている唯一の言葉を、もう一度、発声しようとする。

ごめんね。

想いを込めて、舌触りを確かめて、小さく息を吸って、

「あのな、ノア」

ノアの様子を見ていたネックが、ノアよりも先に口を開いた。

「その気持ちを伝えたい時は、ごめんよりもいい言葉があるんだ」

ネックは一步を踏み出して、

「ありがとうって言うんだぜ」

ノアに向かって、微笑んだ。

ノアはハッとすする。

これから自分が何を言おうとしていたのか、ネックにはわかっていたのだと。

それはきっと、ネックだけじゃない。ノランも、リアムもそうだ。

だから今、三人はこうも優しく、自分に微笑みかけてくれているのだ。

自分はきちんと持っていた。「ごめんね」よりも心の近くにある、その言葉を。

何を言えばいいのか、今ならわかる。

想いを込めて、舌触りを確かめて、小さく息を吸って、

「みんな——ありがとう」

三人に出会えてよかったと、ノアは思う。

花火を背景に、ノアは、にっこりと笑った。

その笑顔を見て、ネックも、ノランも、リアムも、嬉しそうに笑った。

花火が上がる。音がする。バルコニーがカラフルに照らされる。

やがて夜空が落ち着きを取り戻すまでの夢とも思える時間、四人は花火を見ていた。